

社会イメージの形成と地位志向

阿部 晃 士*

Image of the Allocation and Status Orientation

Koji ABE

Summary This paper attempts to delineate the underlying mechanism by which status orientation is produced through the status attainment process. We focus on the cognitive process that builds people's image of the allocation system. Data is analyzed from a survey of Japanese high school students' fathers.

The result of regression analysis with interaction-effects shows that higher occupational status and effort-based allocation image promote status orientation, but there are interaction effects of respondents' status and their allocation image. For lower status people, allocation image has greater influence.

On perception of the allocation system, we propose two hypotheses based mainly on attribution theory. One is justification of self. The other is achievement motivation. Our results indicate that the justification hypothesis is supported, whereas further study is required concerning achievement motivation.

Key words status orientation, allocation image, justification of self, achievement motivation, attribution theory.

キーワード 地位志向, 社会イメージ, 自己正当化, 達成期待, 原因帰属

1. 問題の所在

階層意識研究において、階層や地位に無関係・無関心な「脱階層」的意識やライフスタイルをもつ人びとが出現するのではないかと指摘がある(原, 1994)。しかしその一方で、現在でも階層志向的な価値は、人びとにとって一定の意味をもち続けているように見える。1985年の「社会階層と社会移動全国調査」(SSM調査)のデータを分析した片瀬らによれば、「高度経済成長が終焉を告げ、階層構造の固定化がいわれる今日でも、階層的地位の獲得を重視する価値志向は、依然として多くの人びとの生活意識における1つの機軸として保持され続けている」(片瀬・友枝, 1990: 143)。また、われわれがおこなった調査においても、1987年と1994年の間で、「高い地位」を求め

る志向は、「どちらとも言えない」という中間的な回答がわずかに増えている程度で、ほとんど変化していない¹⁾。本稿は、こうした階層志向的な価値意識、とりわけ高い地位の獲得を重要視する「地位志向」の基盤を明らかにすることを目的としている。

2. 先行研究の検討

階層的地位の獲得に対する人びとの志向を扱った先行研究は、決して少なくはない。地位の上昇移動といわれる「立身出世主義」の変貌に関する先駆的な研究として、安田(1971)の分析がある。また、出世の条件についての質問は、「社会階層と社会移動全国調査」(SSM調査)では1955年や1975年の調査票にも含まれていた(1975年SSM

* 岩手県立大学総合政策学部 〒020-0193 岩手県滝沢村滝沢字菓子

全国調査委員会, 1976)。

その後の分析では、階層的地位を志向する価値意識が、実際に地位達成の過程の途上にある、そのような人びとに特徴的なものであることが示されてきた。門脇は、出世志向に年齢差や地域差がほとんど認められず、むしろ職業や学歴によって異なる傾向があることから、「出世の意欲は、修羅場の真只中にいる者たちに培われる欲求であるらしい」と指摘している(門脇, 1978: 138)。また、片瀬らも、高い地位への志向を含む階層志向性と地位属性との関連を検討しており、「階層的地位の獲得を重視する志向は、実際に企業社会において地位を達成しつつある者に特徴的な価値意識のあり方である」と述べている(片瀬・友枝, 1990: 136)。

このことは、地位獲得に対する志向が、地位達成の過程を通して、まさにその体験のなかで形成されるものであることを示唆している。しかし、人びとの経験が、どのようにして階層的価値への志向へとつながっていくのか、そのメカニズムは明らかにされていない。

その一方で、日本社会における選抜システムの特徴を背景におきなら、社会のイメージに関する分析をおこなった例がある。社会的な成功のための条件についての国際比較(総務庁青少年対策本部, 1994)や、「これまで」「これから」の人生に影響した(する)要因に関する青年の認知(藤村, 1995)、受験・就職・昇進におけるメリトクラシーによる加熱・冷却(竹内, 1995)等に関する分析である。

本稿では、こうした社会のイメージが、達成過程における人びとの体験と、階層的価値への志向とを結びつけるものではないかと考える。以上の先行研究は、人びとの社会的地位と価値意識、もしくは社会的地位と社会イメージの関連を、個別に取り上げるにとどまっている。地位達成の経験のなかで価値意識が形成される、その過程で社会のイメージがどのような役割を果たしているのか、そうした視点から実証的な分析をおこなう必要がある。

そこで、本稿では、「社会のしくみに関するイメージ」が形成されるメカニズムに関する仮説(阿部, 1996; 山口, 1997)を精緻化することにより、価値意識の基盤に関する分析をおこなう。ここでいう「社会のしくみ」とは、社会的地位という資源の配分原理、と言い換えることができる。努力を積み重ねれば高い地位につくことが可能なのか、それとも高い学歴が必要なのか。こうした社会のしくみに関するイメージが、人びとの社会的地位と価値意識とを媒介する機能をもっているのではないだろうか。これを実証的に示すことは、社会階層と人びとの意識のあいだに介在するメカニズムを具体的に取り出す試みであり、階層意識研究のひとつの課題である。

以下では、まずはじめに地位への志向と社会イメージの関連について分析をおこなう。両者の関連を確認した後、さらに社会イメージが形成されるメカニズムを検討することにしよう。

3. データ

分析には、東北大学教育文化研究会(会長: 海野道郎、当時)が1994年11月から1995年2月にかけておこなった「教育と社会に対する高校生の意識—第3次調査—」のデータを用いる。母集団は仙台圏(仙台市のほかに、名取市、多賀城市、黒川郡を含む)にあるすべての高校・高専の生徒とその両親であり、有意抽出(層化三段抽出法)によりサンプリングをおこなっている²⁾。実施方法は高校生についてはホームルームの時間等を利用した自記式集合調査、父母については高校生を通じて調査票の配布と回収をおこなう自記式配票調査である。回収率は、高校生90.1%(1542票)、父親70.3%(1203票)、母親79.0%(1351票)であった。本稿では、このうち父親のデータを用いる。高校・高専の2年生の子をもつ親であることから、回答者の年齢は8割弱が40歳代、55歳まで含めると9割を占めることになる。

4. 階層志向性と社会イメージ

はじめに、階層志向性に対する回答と社会的地

表1 階層志向性の重要度スコア（職業別の平均値）

	専 門	管 理	事 務	販 売	マニュアル	農 業	F 値
階層志向性	7.33	7.83	7.51	7.44	7.09	6.94	6.81***
高い収入	4.11	4.23	4.20	4.15	4.21	4.23	0.76
高い地位	3.22	3.60	3.31	3.29	2.88	2.71	14.72***
人 数	200	223	157	230	246	31	

*** : $p < 0.01$, ** : $p < 0.05$, * : $p < 0.1$

表2 階層志向性の重要度スコア（学歴別の平均値）

	大 学	高専・短大	高 校	中 学	F 値
階層志向性	7.50	7.35	7.37	7.07	2.70**
高い収入	4.12	4.09	4.20	4.24	1.34
高い地位	3.38	3.26	3.17	2.83	10.29***
人 数	369	46	608	138	

*** : $p < 0.01$, ** : $p < 0.05$, * : $p < 0.1$

位との関連を確認しておこう。表1には、片瀬・梅崎（1990）と同様に、「階層志向性」という価値意識について、職業ごとの重要度スコアと分散分析の結果を示した。階層志向性の強さを表す重要度スコアは、「高い収入」「高い地位」という2つの下位尺度における重要度スコアを合計した得点である³⁾。

これによると、どの職業においても、2つの下位尺度のうち「高い収入」の重要度が「高い地位」の重要度よりも高いことがわかる。また職業別にみると、下位尺度の「高い地位」では有意な違いがみられるのに対して、「高い収入」では有意差がみられない。階層志向性が高もっとも高いのは管理職、次いで事務、販売の順となる。マニュアルや農業では、階層志向性は低い。農業については片瀬・梅崎（1990）の指摘の通り、彼らの生活実感とこうした問題設定が合わないということも背景にあるのかもしれない。

次に、学歴による違いを検討しよう（表2）。ここでも、職業別にみたときと同様に、下位尺度の「高い収入」では有意な差がみられないのに対して、「高い地位」では有意差がみられる。学歴の高い層ほど、「高い地位」を重視する傾向にある。

以上のように、階層志向性を構成する2つの下位尺度のうち、「高い収入」については、職業や学歴といった、回答者の社会的地位との関連が認

められない。これは、「高い収入」が、人びとの職業や学歴に左右されることなく、生活の基盤として誰もが望むものであることを示しているであろう。そこで、以下の分析では、「高い地位」を重要視する価値意識を「地位志向」と位置づけ、社会のしくみに関するイメージに注目しながら、その規定因を探っていくことにする。

ここでは、社会のしくみに関するイメージとして、「出世に有利にはたらく条件」についての回答を用いる⁴⁾。出世に有利にはたらく条件は様々であろうが、ここでは「学歴」「努力」の2つの条件に注目する。地位達成過程における学歴の重要性に関しては指摘するまでもないことであり、また、努力に関しても「努力が出世に有利にはたらかない」との認知が不公平感を高める（阿部、1996）など、人びとの意識や行動に与える影響は大きいと推察されるからである。それぞれの条件に関する出世に有利かどうかについての回答を「学歴認知」「努力認知」と呼ぶことにしよう。

こうした社会のイメージは、人びとの地位志向をどのように規定しているのだろうか。ここでは重回帰分析によって検討する。

ただし、分析対象は、従業上の地位における自営業、仕事の内容における専門職を除いた男性とする。自営業についてはそれ自体が職歴上の到達的職業であること、専門職についてはそれ自体で相対的に高い威信や収入を享受できる職業である

表3 地位志向に関する重回帰分析 (標準偏回帰係数)

説明変数	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4	モデル5
従業先規模	0.054	0.050	0.059	0.056	0.059
学歴：大卒	0.052	0.053	0.030	0.052	0.049
職業：事務・販売	-0.093**	-0.074*	-0.094*	-0.091**	-0.089**
職業：マニュアル・農業	-0.255***	-0.227***	-0.255***	-0.249***	-0.250***
努力認知	0.092**	-0.059	0.154**	0.093**	0.087*
学歴認知	0.017	0.016	0.022	0.056	-0.053
努力認知×事務・販売		0.133**			
努力認知×マニュアル・農業		0.137**			
努力認知×大卒			-0.102**		
学歴認知×事務・販売				-0.034	
学歴認知×マニュアル・農業				-0.034	
学歴認知×大卒					0.112**
決定係数	0.081***	0.091***	0.088***	0.082***	0.090***
交互作用の検定 (F 値)		3.735**	4.997**	0.247	6.071**

*** : $p < 0.01$, ** : $p < 0.05$, * : $p < 0.1$

注) 係数の値のうち空欄は、モデルに投入しなかった項を示している。

ことが知られており (原, 1981 など)、これらの職業については、以後の分析において、「管理職につくこと」を出世の指標として用いることが適切ではないと判断したためである。

重回帰分析における説明変数としては、従業先の規模⁵⁾、学歴ダミー変数 (大卒 = 1, 非大卒 = 0)、職業ダミー変数 (「管理職」「事務・販売」「マニュアル・農業」の3分類とし、他の職業との対比のうえで注目する「管理職」を基準とした)、努力認知と学歴認知 (回答者ごとに標準化した値⁶⁾) を用いる。また、努力認知と学歴認知については、それぞれ学歴ダミー変数および職業ダミー変数との間の交互作用効果を念頭におき、この組み合わせごとに分析をおこなった。

まず、交互作用項を含まない分析の結果 (表3のモデル1) によると、職業のダミー変数および努力認知が有意な効果をもつ。職業ダミー変数の標準偏回帰係数の符号はマイナスであり、事務・販売職やマニュアル・農業に比べて、管理職の人びとの方が高い地位につくことを重視する傾向にある。また、努力認知の正の効果があり、努力が出世に有利にはたらいていると認知することが、高い地位への志向に関連していることがわかる。説明変数のうち従業先規模や学歴、学歴認知は、

有意な効果はみられない。

次に、交互作用項を加えた分析結果をみていこう。ここでは、それぞれの重回帰分析の決定係数に関するF検定により、交互作用効果の有意性を検討する (Bohnstedt & Knoke, 1988)。それによると、努力認知と職業 (モデル2)、努力認知と学歴 (モデル3)、学歴認知と学歴 (モデル5) の3つの組み合わせで、交互作用効果が有意になっている。

では、その交互作用効果とはどのようなものなのか、それぞれについて回答の傾向をみてみよう。図1～図3には、回答者の属性 (職業もしくは学歴) と、出世条件の認知の組み合わせごとに、地位志向の重要度スコアの平均値を示した。努力認知と学歴認知は、標準化した値の男性全体での平均値を基準にして、(相対的に) 出世に有利とは認知していないグループと、出世に有利と認知しているグループに分割してある。

まず、職業と努力認知の交互作用効果についてみると (図1)、管理職の人びとは、努力が出世に有利にはたらくと認知するか否かに関わらず、地位志向が高い。それに対して、事務・販売職やマニュアル・農業の人びとは、努力の有効性を認知している場合には高い地位志向を示しているが、

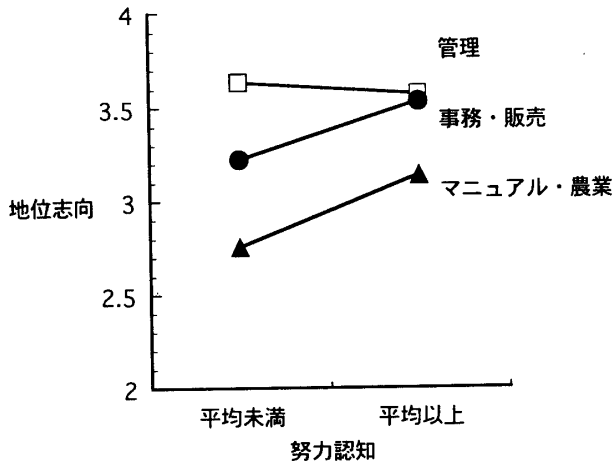


図1 職業別にみた努力認知と地位志向（平均値）

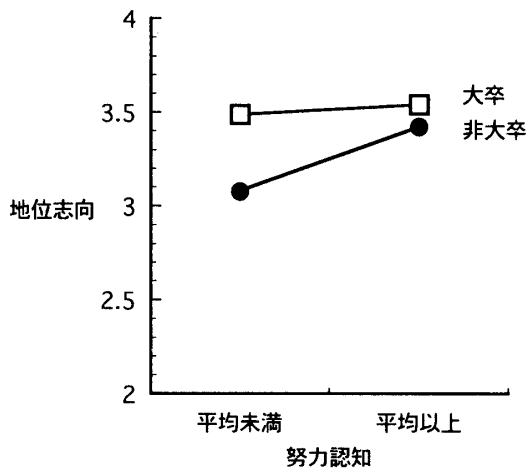


図2 学歴別にみた努力認知と地位志向（平均値）

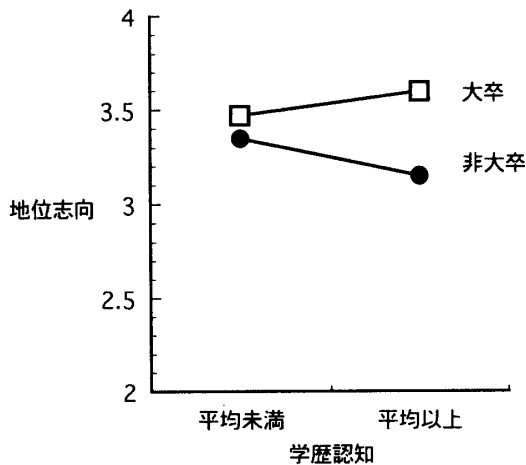


図3 学歴別にみた学歴認知と地位志向（平均値）

そうでない場合は、地位志向が低くなっている。図2をみると、大卒の人びとでは、努力が出世に有利だと認知するか否かに関わらず地位志向が維持されている。それに対して、非大卒の場合には、

努力の有効性を認知している場合には高い地位志向を示しているが、そうでない場合は、地位志向が低くなっている。これは、図1の事務・販売職やマニュアル・農業と同様の傾向である。最後に、図3によると、学歴が出世に有利だと認知することは、大卒の者にとっては出世志向を若干高める方向で効果があるのに対して、非大卒の者にとっては、地位志向を下げる方向に関連している。

以上のことから、地位志向は、本人の社会的地位そのものに規定されるとともに、出世条件の認知という社会のしくみに関するイメージにも、規定されていることが確認された。また、交互作用効果の検討からは、地位志向に対する社会のしくみに関するイメージの効果は、本人の職業や学歴との組み合わせによって異なる場合があることが示された。相対的に、社会的地位の低い人びとにとって、社会イメージの効果が大きいようである。

それでは、こうした社会のしくみに関するイメージは、どのようにして形成されているのか。そのメカニズムの検討に入ることにしよう。

5. 社会イメージの形成

5. 1. 仮説の検討

ここでは、社会イメージの形成を、原因帰属の過程として捉えることにする。人びとは、自分が現在の地位を得るまでの過程を振り返り、恵まれた地位を獲得できた理由は何かを、あるいはなぜ自分が不本意な境遇にとどまっているのかを思い描き、自分を納得させていると考えられる。

帰属理論によれば、われわれは、意外な出来事、課題の失敗、重要な出来事などを経験したとき、より積極的に帰属活動をおこなう（Weiner, 1985; Graham, 1991; 蘭・外山, 1991など）。自らの適応のために環境を秩序あるものとして認識する必要があるためである。原因帰属は様々な場面でおこなわれるが、特に成功と失敗に関する帰属では、自分にとって都合のよい帰属のバイアス（セルフ・サービング・バイアス）が存在し、成功を自己の能力などに帰することが、自己評価を高める役割を果たすことも指摘されている⁷⁾。

Weiner (1985) によると、達成場面における成功・失敗の原因は、原因の位置、安定性、統制可能性の3つの次元により整理することができる。このうち原因の位置は、原因の所在が帰属をおこなう個人の内部にあるか外部にあるかを、安定性は、状況の変化や時間の経過による変動の大きさを、統制可能性は、行為者が意図的に変化させることのできる可能性の有無を、それぞれ意味している。この3つの次元を用いることで、例えば、能力（ここでいう能力は「才能」に近い意味で用いる）は内的・安定・統制不可能、一時的な努力は内的・不安定・統制可能などと分類することができる。

その一方で、こうした原因の次元は、帰属過程の後にも、当事者の感情や将来の課題への達成期待に影響をもつ。内的次元への帰属はプライドなどの自尊感情、統制可能性次元への帰属は罪悪感や怒りなど、といったように帰属される原因の次元により、発生する感情が異なることが指摘されている。また、達成期待については、Weiner は安定性次元との関連を指摘していたが、最近では、特に統制可能性次元との関わりが検討されており、統制可能な原因への帰属は、将来の達成期待を高めるといわれている（蘭ら、1991）。

ここでは、こうした知見にもとづき、「自己正当化仮説」「達成期待仮説」という2つの対立仮説を設定することにする。

自己正当化仮説は、人びとが自らの過去を振り返る際の自尊感情の維持を、より重視した仮説である。社会のイメージに関するこのような仮説は、既に阿部（1996）や山口（1997）が提示してきたものだが、いずれも自己正当化仮説の分析としては不十分であった。職業上の達成が同じであってもそれに対してどのような意味付与がなされるかは、当人の学歴によって異なると予想できるため、この仮説を検証するには、学歴と職業の交互作用効果を考慮する必要があると考えられる。しかし山口の分析では、職業と学歴の交互作用効果が考慮されていなかった。阿部も、交互作用効果に関する仮説を明示的に検討してはいなかった。そこ

で、本稿ではそのような交互作用も含めて予測を導出したうえで、分析をおこなうことにする⁸⁾。

一方、達成期待仮説は、人びとが原因帰属をおこなった後に発生する期待を、より重視した仮説である。地位達成の過程は、その場限りの課題ではない。そこで形成される社会のイメージにおいては、自らの達成に関する将来展望が、より重要となるとの考え方である。自らが不利な立場に置かれていると考えれば、現状を統制可能な原因に帰属することが、将来の達成への期待をつなぐ意味をもつだろう。逆に有利な立場にあると考えれば、統制不可能な原因に帰属することが、将来に関しても地位を脅かされる可能性が低いという意味で、期待をつなぐことになるであろう。

【仮説1：自己正当化仮説】

人びとは、社会のしくみを認知する際、自分の現在の位置を正当化する方向に認知するであろう。自分が有利な立場にあると考える場合には、その原因を内的な原因や統制可能な原因に帰属する。不利な立場にあると考える場合には、外的な原因や統制不能な原因に帰属する。

【仮説2：達成期待仮説】

人びとは、社会のしくみを認知する際、自分の将来の達成に期待をつなぐように認知するであろう。自分が有利な立場にあると考える場合は、その原因を統制不能な原因に帰属する。不利な立場にあると考える場合には、統制可能な原因に帰属する。

次に、両仮説のどちらが適合的かを検討するために、それぞれの仮説が成り立つ場合に、データにどのような傾向が表れるのかに関して予測を導出する。前述の次元との関連でいえば、「学歴」は、内的で安定しており、（日本社会では）統制不能な原因と位置づけることができる。また「努力」は、一時的なものと捉えるか継続的なものと捉えるかによって安定性次元では解釈の余地を残すが、内的で統制可能なもの、と位置づけること

は可能であろう。

ここでは、回答者の職業と学歴の組み合わせによって、人びとの置かれている社会的地位を操作することにする。このとき、それぞれの仮説からどのような予測が可能であろうか。

まず、自己正当化仮説について考えてみよう。

【予測1-1：自己正当化仮説からの予測（職業と配分原理の認知）】

管理的職業についている者は、出世に有利な条件として「努力」を挙げる。

管理的職業についていることは、地位達成の過程で成功しつつあることを意味していると考えよう。そのため、自らが有利な立場にあると考えるこれらの人びとは、内的で統制可能な、努力原理が出世に有利にはたらいていると認知するのである。

一方、学歴原理に関しては、職業と学歴との交互作用を考慮する必要がある。なぜなら、管理職についていない（不利な立場にある）者であっても、学歴の高い層では、その原因を学歴に帰属しては、自己を正当化することができないからである。

【予測1-2：自己正当化仮説からの予測（職業と学歴の交互作用）】

管理的職業についていない者のうち、学歴の相対的に低い層では、出世に有利な条件として「学歴」を挙げる。

続いて、達成期待仮説について考えてみよう。

【予測2-1：達成期待仮説からの予測（職業と配分原理の認知）】

管理的職業についていない者は、出世に有利な条件として「努力」を挙げる。

自らが不利な立場にあると考える、管理的職業についていない人びとは、統制可能な条件である

「努力」が出世に有利にはたらくと認知するとの予測である。

ここでも、自己正当化仮説の場合と同様に、学歴原理に関しては、職業と学歴との交互作用を考慮する必要がある。管理職についている者であっても、学歴の低い層では、その原因を学歴に帰属しては、達成期待を高めることができない。このため、学歴に帰属することで達成期待を高めることができるのは、管理職についている者のなかでも、相対的に学歴の高い層ということになる。

【予測2-2：達成期待仮説からの予測（職業と学歴の交互作用）】

管理的職業についている者のうち、学歴の相対的に高い層では、出世に有利な条件として「学歴」を挙げる。

次節では、以上の予測に適合的な結果を得ることができるかを検討していこう。

5. 2. 社会イメージの形成メカニズム

はじめに、出世条件の認知について、回答者の属性との関連を確認しておこう。回答を「非常に有利」の4点から「有利になっていない」の1点までに得点化してたうえで、表4には職業別に、表5では学歴別に平均値を求め分散分析をおこなった⁹⁾。これによると、職業別では管理職、学歴別では高学歴の男性が、努力が出世に有利な条件になっていると認知している。相対的に、高い社会的地位の人びとが、努力と認知する傾向にあるといえるだろう。また、学歴が有利な条件になっていると認知しているのは、マニュアルや高専卒・中卒の男性である。

では、こうした出世条件の認知が、「自己正当化仮説」や「達成期待仮説」からの予測にあてはまる傾向にあるのだろうか。重回帰分析によって検討しよう。

説明変数として、学歴ダミー変数（大卒＝1，非大卒＝0）、職業ダミー変数（「管理職」「事務・販売」「マニュアル・農業」の3分類。他の職業

との対比のうえで注目する「管理職」を基準とした)、学歴と職業の交互作用項を投入した。このほか、統制変数として「従業先の規模」を用いた。

被説明変数である努力認知と学歴認知に関しては、個人内で標準化した値を用いた。

表6、表7には、出世条件としての努力の認知と学歴の認知に関して、重回帰分析の結果と、2

つの仮説から導かれた予測を示した。表中の予測の列において、0は説明変数の有意な効果がないことを、+は正の効果があること、-は負の効果があるという予測をそれぞれ示している。また、交互作用効果については、○は交互作用あり、×は交互作用なしとの予測を意味している。なお、学歴認知に関しては、2つの仮説からいずれも交

表4 出世条件の認知（職業別の平均値）

	専 門	管 理	事 務	販 売	マニユアル	農 業	F 値
努 力	2.96	3.15	3.00	2.91	2.83	3.03	4.02***
学 歴	3.38	3.26	3.36	3.21	3.41	3.29	2.97**
人 数	200	223	156	230	247	31	

*** : $p < 0.01$, ** : $p < 0.05$, * : $p < 0.1$

表5 出世条件の認知（学歴別の平均値）

	大 学	高専・短大	高 校	中 学	F 値
努 力	3.05	2.89	2.95	2.85	2.77**
学 歴	3.15	3.42	3.38	3.45	10.95***
人 数	369	45	608	138	

*** : $p < 0.01$, ** : $p < 0.05$, * : $p < 0.1$

表6 努力認知に関する重回帰分析（標準偏回帰係数）

説明変数	モデル1	モデル2	正当化予測	達成期待予測
従業先規模	-0.120***	-0.120***		
学歴：大卒	0.080**	-0.091	0	0
職業：事務・販売	-0.127***	-0.126**	-	+
職業：マニユアル・農業	-0.156***	-0.141**	-	+
大卒×事務・販売		0.003		
大卒×マニユアル・農業		-0.037		
決定係数	0.039***	0.040***		
交互作用の検定（F値）		0.419	×	×

*** : $p < 0.01$, ** : $p < 0.05$, * : $p < 0.1$

注）係数の値のうち空欄は、モデルに投入しなかった項を示している。

表7 学歴認知に関する重回帰分析（標準偏回帰係数）

説明変数	モデル1	モデル2	正当化予測	達成期待予測
従業先規模	0.146***	0.143***		
学歴：大卒	-0.184***	-0.155**	0	0
職業：事務・販売	0.033	0.054	0	0
職業：マニユアル・農業	0.075	0.090*	0	0
大卒×事務・販売		-0.034		
大卒×マニユアル・農業		-0.019		
決定係数	0.057***	0.057***		
交互作用の検定（F値）		0.170	○	○

*** : $p < 0.01$, ** : $p < 0.05$, * : $p < 0.1$

注）係数の値のうち空欄は、モデルに投入しなかった項を示している。

相互作用ありとの予測が導かれているため、表7においては、両仮説の適否を識別できる表示となっていない。実際には交互作用効果の内容に関する予測が異なる（予測1-2と予測2-2）ので、これについては、交互作用項に有意な効果がみられた場合に、その傾向によって予測の適否を見極めることにする。

分析の結果をみてみよう。

ここでも、それぞれ交互作用項を含まないモデルと交互作用項を含んだモデルによる分析結果を併記し、交互作用効果の検定のために、それぞれの決定係数を用いたF検定をおこなっている。

まず、努力認知、学歴認知のいずれについても、統制変数として用いた従業先規模の効果が有意である。規模の大きい従業先に勤めている者ほど、努力は出世に有利な条件になっておらず、学歴は有利な条件になっていると認知する傾向がある¹⁰⁾。

予測との適合性をみると、努力の認知に関しては、職業ダミー変数（事務・販売、マニュアル・農業）の負の効果がみられる。他の変数をコントロールしても、管理職層の方がこれらの職業に比べて、出世の条件として努力を挙げる傾向にある。学歴の弱い正の効果もみられた。学歴と職業の交互作用については、有意な効果はみられない。したがって、努力原理については、おおむね自己正当化仮説に適合的な結果が得られた、とすることができる。

一方、学歴認知に関しては、学歴の負の効果が有意となっており、大卒の者は、それ以外の学歴の者に比べて、出世の条件として学歴を挙げない傾向にある。ここでも、学歴と職業の交互作用効果はみられない。したがって学歴認知については、前述の2つの仮説は、そのままでは、どちらもあてはまらないことになる。

しかしここで、次のように考えてみることもできる。第1に、大卒者とそうでない者に用意されているのがまったく別のコースだと仮定することである。大卒で管理職についていない者もいずれは管理職になるのであり、非大卒で管理職の者の昇進にもいずれ限界が来る、ということである。

大卒の者は、非大卒の者に比べて高い地位につくことが約束されているとの将来像に対して、しかしそれは「学歴」という条件によるものではない、と帰属していることになる。学歴認知の分析結果は、将来まで見越したうえでの自己正当化といえるのではないだろうか。第2に、大卒者と非大卒者で、出世に関する比較をおこなう際の準拠集団が異なっている、と仮定してみるとどうだろう。例えば、大卒者は同学歴すなわち大卒者同士の競争をイメージし、非大卒者は、大卒の者も含めた競争をイメージしているとする。この場合、大卒者は、「大卒」という意味での学歴では出世は決まらなないと認知する。管理職についていない者も、学歴に帰属することはできない。また、非大卒者はおそらく自分よりも早く昇進する（または昇進の可能性が開かれている）大卒者の姿を視野に含めて判断するため、学歴が出世に有利にはたらいっていると認知するのではないか。

出世条件としての学歴の認知に関する分析結果は、こうした仮定のもとであれば、自己正当化仮説に適合的な結果と解釈することができる。ただし、以上のような仮定が成立するかどうかに関しては、本稿のデータで直接、検証することは不可能である。

6. おわりに

本稿では、「社会のしくみに関するイメージ」が形成されるメカニズムに着目して、地位志向という階層志向性の基盤に関する分析をおこなってきた。最後に、分析の結果を整理し、その意義を検討するとともに、残された課題を確認しておく。

まず、階層志向性のうち地位志向について、回答者の職業的地位が効果をもち、管理職についている、相対的に職業的地位の高い者ほど、地位志向の水準が高いことが明らかになった。また、地位志向には、出世の条件の認知という社会のしくみに関するイメージが関連しており、努力が出世に有利だという認知が、地位志向の高さに結びついていった。しかし、こうした認知と志向の関連つ

いてには、回答者の地位による交互作用効果があり、相対的に地位の低い者ほど、こうした認知の影響を受けやすいことが明らかになった。

社会のしくみに関するイメージの形成については、努力原理に関しては職業的地位が高い者ほどその有効性を認知しており、学歴原理に関しては学歴が低い者ほどその効果を認知していることになる。これは、学歴原理に関しては本稿で検証できない仮定を付加することが必要ではあるが、全体として「自己正当化仮説」に適合的な結果と解釈した。

以上より、次のようなことが指摘できる。

地位志向は、管理職を中心とする相対的に高い社会的地位を得た人びとに保持されている。また、その背後には、「出世は努力によって達成することができる」という社会のイメージが存在しており、こうした社会イメージは自己を正当化する方向に形成されている。その意味では、出世によって「高い地位につくこと」は、人びとによって一定の、自尊心の源泉となるような意味付与がなされており、それが地位志向の基盤となっているといえることができる。

一方で、相対的に社会的地位の低い人びとにとって、「高い地位につくこと」を志向するか否かは、どのような社会のイメージを形成するかに依存している。「努力によって達成できる」「学歴では決まっていない」といったイメージを形成することができなければ、高い地位への志向は維持できないものである。

最後に、残された課題として、以下の点が挙げられる。

まず、自己正当化仮説の適合性の解釈には、人びとの準拠集団や判断の視野に関する仮定が必要であった。この仮定の適切さに関しては、さらに今後の検討が必要であろう。また、学歴や努力といった出世条件の、原因の位置、安定性、統制可能性といった次元への位置づけに関しては、実際に人びとの間にどの程度のコンセンサスがあるのか、そしてそうした出世条件相互の関連について人びとがどのように認識しているかについても確

認する必要がある。

また、本稿で用いたデータは、高校2年生の子をもつ父親に限定されたものである。地位達成過程のまさに途上にある人びとという意味では、この年齢層の分析をおこなうことに、一定の意義があるものと判断できる。しかし、今後は、幅広い年齢層について、価値志向や社会のしくみに関するイメージが形成される過程を検討することが必要である。地位志向や社会のしくみに関するイメージが地位達成過程のなかで形成されるという本稿の視点に立つならば、例えば、「自己正当化」か「達成期待」かに関しては、年齢層によって適合的な仮説が異なること等も考えられるであろう。

この他、自営業・専門職の人びとや、女性における出世志向、社会のイメージとそれぞれの形成過程を明らかにすることも残された課題である。分析の過程では、専業主婦に限って夫の属性による分析を試みたが、標本のサイズが小さくなるため、安定した結果が得られなかった。ただし、一方で、そのような分析は、本稿で分析した男性雇用労働者を中心とする人びとにとっての「出世」や「社会的な成功」のモデルを、その他の人びとにあてはめているに過ぎない。こうした人びとにとっての出世や社会的成功とは何か、そしてそのための条件として彼らがイメージする社会のしくみとはどのようなものかを検討することで、本稿の分析における地位志向や社会のイメージのもつ意味をより明確にする必要がある。

最後に、本稿の分析によれば、同年代で管理職についていない、相対的に職業的地位の低い人びとは、「努力は出世に有利にはたっていない」という社会イメージをもつ傾向にあり、学歴の相対的に低い人びとは、「出世は学歴によって決まっている」というイメージを形成していた。こうした社会のイメージがもたらすものとして、例えば社会に対する不公平感が考えられ、そのメカニズムに関する分析もおこなわれつつある（阿部, 1996; 木村, 1998）。今後はそうした分析を継続するとともに、価値意識におけるほかの志向性も含めて、社会のイメージによって人びとのなかに

もたらされている意識の様態を検討していくことが重要である。

注

- 1) 「教育と社会に対する高校生の意識」調査の、第1次調査と第3次調査における、高校生とその両親の回答。詳しくは、(東北大学文学部教育文化研究会, 1988) および(鈴木・海野・片瀬, 1996)を参照。
- 2) 具体的には、はじめに仙台圏のすべての高校・高専を公立・私立、共学・別学、普通高校・職業高校の基準から分類し、調査を依頼する高校を選んだ(第1次抽出)。次に、各高校などの協力者と協議のうえ、調査対象となるクラスを選択した。基本的に各校2年生の2クラス(科が分かれている場合にはそれに応じて追加)とし、普通科以外は、各校を代表するようなクラスに依頼した(第2次抽出)。最後に、当事者と関係者の承諾を得たうえで、抽出されたクラスの生徒全員とその父母を対象としている。なお、詳細については(鈴木・海野・片瀬, 1996)を参照。
- 3) 「高い収入を得ること」「高い地位につくこと」など8項目について、「あなたにとって次のようなことはどのくらい重要でしょうか」という質問をおこない、「かなり重要である」から「全く重要でない」までの5段階評定で回答を求めた。重要度スコアは、「かなり重要」の5点から「全く重要でない」の1点までに得点化したものである。
- 4) 「今の日本社会では、次のようなことはそれぞれの程度、出世に有利な条件になっていると思いますか」との質問である。「努力すること」「能力や技術があること」「学歴が高いこと」「コネがあること」「業績をあげること」の5項目について、「非常に有利な条件になっている」から「有利な条件にはなっていない」までの4段階で回答を求めた。なお、ここでの「出世」という用語は、いわゆる「立身出世」の意味ではなく、むしろ一般的な社会的成功を意味するものとして用いることにする。
- 5) 会社全体の従業員数についてカテゴリーを設けて尋ねたものだが、ここでは各カテゴリーの階級値を用いた連続変数として投入する。なお、従業員先が官公庁の場合、規模は1,000人以上のカテゴリーに分類してある。
- 6) 出世条件に対する個々の回答者の「敏感さ」を調整するため、同じ調査で質問を設けた「能力や

技術」「コネ」「業績」を合わせた5つの配分原理に対する回答を用いて回答者ごとに標準化した値を用いる。例えば、努力認知の値は、努力が出世に有利になっていると思うかという質問への4段階尺度での回答と、5項目への回答の平均値との差をとり、これを5項目の回答の標準偏差で割って求めたものである。

- 7) 帰属過程に関連するものとして、対応的推論理論や分散分析モデル、自己効力の理論などのモデルも挙げられる。ただし、本稿でのデータ分析にこうしたモデルを適用することは難しい。これらについては、(蘭ら, 1991)や(Graham, 1991)等を参照。
- 8) なお、山口(1997)は、学歴社会イメージの形成に関して、「自己正当化仮説」に加えて「自己経験の一般化説」を検討している。「自己経験の一般化説」とは、学歴と能力との関係についても考慮したもので、「人々は自分自身の学歴、社会的成功の度合い、能力(自己評価)のレベルを矛盾なく説明できるような社会イメージを描きやすい」という主張である。しかし、本稿での分析では、能力の自己評価に関する変数が存在しないためこの仮説を検討することはできない。
- 9) 表4と表5では、無回答をリスト単位で欠損値にしている(努力の認知と学歴の認知のどちらかに回答していない者は欠損値になる)。このため、ペア単位で欠損値の指定をおこなった場合(阿部, 1996)と一部の数値が異なっているが、全体の傾向には影響しない。
- 10) 官公庁に勤めている者に固有の影響がある可能性も考えられたため、公務員を除いた分析も試みたが、得られた結果はほぼ同じであった。ここでは公務員も含めた分析結果を示す。

引用文献

- 1975年SSM全国調査委員会. 1976.『1975年SSM調査基礎集計表』1975年SSM全国調査委員会.
- 阿部晃士. 1996.「高校生と両親の出世観—社会のしぐみに関する認知・理念・不公平感—」鈴木昭逸・海野道郎・片瀬一男(編)『教育と社会に対する高校生の意識—第3次調査報告書—』東北大学教育文化研究会, 43-58.
- 蘭 千尋・外山みどり(編). 1991.『帰属過程の心理学』京都: ナカニシヤ出版.
- Bohnstedt, George W. & David Knoke. 1988. "Statistics for Social data Analysis (2nd

- ed.)". Itasca, IL: F. E. Peacock Pub. 『社会統計学—社会調査のためのデータ分析入門—』海野道郎・中村 隆監訳 東京: ハーベスト社 1990.
- 藤村正之. 1995. 「生得: 努力: 偶然 = 3 : 5 : 2 —何が人生を決めるのか—」藤村正之 (編) 『都市と世代文化に関する実証的研究』科学研究費補助金・研究成果報告書. 185-207.
- Graham, Sandra. 1991. "A Review of Attribution Theory in Achievement Contexts". *Educational Psychology Review* 3(1): 5-39.
- 原 純輔. 1981. 「職業経歴の社会学的研究—到達点と課題—」雇用促進事業団職業研究所『職業の社会学的研究 その3』2-31. (『リーディングス日本の社会学8 社会階層・社会移動』直井 優・原純輔・小林 甫編著 東京: 東京大学出版会 1986に再録)
- . 1994. 「『近代主義者』の階層観」『理論と方法』9(2): 157-169.
- 門脇厚司. 1978. 『現代の出世観—高学歴化でどう変わったか—』東京: 日本経済新聞社.
- 片瀬一男・友枝敏雄. 1990. 「価値意識—社会階層をめぐる価値志向の現在—」原 純輔 (編) 『現代日本の階層構造 第2巻—階層意識の動態—』東京: 東京大学出版会. 125-147.
- 片瀬一男・梅崎篤史. 1990. 「価値意識の世代間伝達—家族における社会化効果の規定因—」海野道郎・片瀬一男 (編) 『教育と社会に対する高校生の意識—第2次調査報告書—』東北大学文学部教育文化研究会. 9-24.
- 木村邦博. 1998. 「教育、学歴社会イメージと不公平感」『理論と方法』13(1): 107-126.
- 総務庁青少年対策本部 (編). 1994. 『世界の青年との比較からみた日本の青年—第5回世界青年意識調査報告書—』東京: 大蔵省印刷局.
- 鈴木昭逸・海野道郎・片瀬一男 (編). 1996. 『教育と社会に対する高校生の意識—第3次調査報告書—』東北大学教育文化研究会.
- 竹内 洋. 1995. 『日本のメリトクラシー構造と心性—』東京: 東京大学出版会.
- 東北大学文学部教育文化研究会. 1988. 『教育と社会に対する高校生の意識—第1次調査報告書—』東北大学文学部教育文化研究会.
- Weiner, Bernard. 1985. "An Attributional Theory of Achievement Motivation and Emotion". *Psychological Review* 92: 548-573.
- 山口 洋. 1997. 「学歴に関する社会イメージと子供に対する教育期待」『金沢大学文学部論集 (行動科学・哲学篇)』17: 61-81.
- 安田三郎. 1971. 『社会移動の研究』東京: 東京大学出版会.

謝辞

本稿の草稿段階では、海野道郎教授 (東北大学)、片瀬一男教授 (東北学院大学)、木村邦博助教授 (東北大学) より、貴重なコメントをいただきました。心よりお礼申し上げます。

(1999年3月4日受理)